

ホセ・オルテガの格言集

「蝶の雑記帳 129」

ホセ・オルテガ・イ・ガセットの書物『大衆の反逆』（岩波文庫）を読んだ。1920年代後期スペインで新聞紙上に書かれた著述を集めて1930年に出版されたという（この文庫本には1937年と1938年に添えられたプロローグとエピローグが加えられている）。すでに老年であった佐々木孝という人がその著作を新たに翻訳することを思い立ち、2020年に出版された労作である。記者死去のあと岩波文庫に入れられたのだが、子息による「訳者あとがきに代えて」が、67歳から2018年に79歳で亡くなるまで12年かけての訳業であること教える。訳文は明快で、100年前の著作の文章を現代に伝えるのに成功している、と思う

著作がなされていた第一次世界大戦後の時代、スペインは政治的混乱のなかにあった。この著作が書物になった年の翌年1931年には、国王が亡命し共和制になった。1936年にはフランコ将軍の反乱が起きて、「フランス人のためのプロローグ」と「イギリス人のためのエピローグ」が加えられたとき、ホセ・オルテガは亡命中であった。フランコの反乱は、ドイツで政権を取ったヒトラーのあと押しがあったからである。この書物は、再び硝煙が上がり始めた20世紀初期の世界を前に、元来哲学者として歩み始めたオルテガが社会と人間を見つめて発した言葉を集めたものである。

時代と対決するオルテガは、それぞれ具体的なテーマを考察するときしばしば、自己の哲学的な見解を説き起こしてから内容に切りこんでいく。そこにはたいてい「生」や「生きる」などという言葉が含まれているから、その論述を、オルテガの「生の哲学」の展開と呼ぶことが可能である。そして『大衆の反逆』という書物の主題は、20世紀初期の世界でありその社会と人類が直面している課題である。議論は、その意気込みから新たな20世紀についての文明論へ向かうことになる。

書名「大衆の反逆」が表わそうとしているのは、20世紀の社会が人類史上でも初めての状態となっているということである。オルテガの見立てではこの状態は、17世紀から始まり18世紀に進展し前世紀19世紀に完成したもので、近代が階層的な古い人間関係を解体し、大衆が社会の主導的な位置を占めるようになったことで生じたのである。それが20世紀に危機を生み出したのだ。大衆化した社会は、それまでの社会で主導的な役割を果たした少数のグループがもっていた社会を有効にリードする力をもたず、社会をまとめる規範をはじめとする必要な諸制度・手段・手法・・・をもたない。その文明批判は遠くまで及ぶ。科学者やあらゆる種類の専門家までが大衆の一人と化して、科学や技術やそのほかこれほど進んだ社会になったのに、社会を有効にまとめるはずの「法」などが力を失っていると見ている。

そういう状況がファシズム・ナチズム・ソヴィエトの全体主義などの危機を生み出している、というのが 20 世紀前半を生きたオルテガの認識である。自身の生まれた国スペインの状況によってそれを身をもって痛感し、その危機に立ち向かう批判を展開している。オルテガはとりわけヨーロッパでその状況を問題としているが、歴史を振り返る日本人にとってもけっしてヨーロッパだけの問題ではない。現実には 20 世紀前半の東アジアで、日本が先頭に立って同根の危機を引き起こした。100 年前の歴史としてそれを詳しく知ることは重要である。

ところがそれだけでは終わらない。21 世紀初期の現在の世界が、100 年前とたいへんよく似た状況になっていることを痛感せざるをえない事態になっている。今日のわれわれは、目の前に、100 年前にオルテガが直面した社会と似たもう一つの社会を見ている。しかも、今日の社会は、100 年前よりもはるかに大衆化してはるかに流動的で切羽詰まっている。それなのに、100 年経ったあとのわれわれは解決策を持っていない。古い先短いわたしはほとんど絶望しかけている。

それでも考えなければならぬが、ここに何事かを書きつける力がない。せめて何か方策を見出すために、オルテガがその著書に書きつけた現実に対決する言葉を格言として書きとめて、そこから力を汲みとることにしたい。

人間と社会を知るための格言集

[一]

p31 歴史は人間の現実である。他に現実はない。人間は歴史の中でいまあるがままの人間となった。

p40 人には時代に働きかける義務がある。

p53 人間は、蓄積された過去のある高さから存在し始める。
…人間の真の宝は、間違いについての記憶、何千年もの間一滴一滴上澄みを醸成してきた長い生の体験にある。

[二]

P96 見通しが利かないということ、地平線があらゆる可能性に開かれているということこそが真正なる生、つまり生の真の充実だからである。

P97 正当かつ自然な視点はただ一つしかない。すなわち生の中に腰を据え、内部から生を眺めることであり、…

[四] 生の増大

p106 私たちが生きているということは、状況としていくつかの特定の可能性を前にしているということと同じなのだ。そしてこの選択・決断の可能性という領域は、普通「環境」と呼ばれているものとなる。あらゆる生は、「環境」もしくは「世界」の中にあるということだ。なぜならこれこそ「世界」という観念の原初的な意味だからである。世界とは私たちの生の可能性の集積に他ならない。したがってそれは、私

たちの生とは別個で無関係なものではなく、生の周辺そのものなのだ。それは私たちがそうなり得る姿を、私たちの生の潜在能力を表わしている。この潜在能力が実現されるためには、自らが具体化されなければならない。換言するなら、私たちが実際になれるのは、自分になることのできるものの最小部分にすぎない。だからこそ、私たちには世界がかくも巨大なものに、そしてその中にいる私たち自身がかくも微小に見えるのだ。世界もしくは可能性としての私たちの生は、常に私たちの運命以上のもの、つまり実際の生以上のものなのだ。

p107 人間の生は、かつて無かったような、信じられないほど大きな可能性の領域をもっている。知性の分野においては、いままで以上に可能な観念形成の道があり、…

[五]

p115 生が自分の世界を選ぶのではない。そうではなく、生きることは、ある特定の交換不可能な世界、この私たちの現在の生の中におのれを見出すことなのだ。

私たちの世界は、私たちの生を構成する宿命の広がりである。しかしこの生の宿命は、機械的なそれとはおよそ似るところが無い。私たちは、その軌道が前もって絶対的に定められている弾丸のように生の世界に打ち出されるのではない。私たちがこの世に——世界とは常にこの、今ここにある世界である——生れ落ちるや否やはまってしまった宿命は、それ

とはまったく逆なのだ。つまりそれは、私たちに一つの軌道を強制するのではなく、いくつかの軌道を与え、選択を迫っている。私たちの生のなんと驚くべき条件よ！ 生きるとは宿命的に自由を行使しなければならない、つまりこの世界の中で自分が「かくあらん」とする姿を決断しなければならないと自覚することに他ならない。

生においては「環境が決定する」というのは嘘である。…決定する当のものは、私たちの性格である。

p116 以上のことは、集団的な生においても妥当する。集団的な生の中にも、まず可能性の地平があり、次いで一つの選択への決意があり、かくして集団的な存在の効果的方法が決定される。そして決意はその社会が持っている性格に、あるいはそれと同じことだが、社会の中で支配的なタイプの人間に由来する。・・・

[六]

p125 歴史は予見不可能だというのは嘘である。もし将来というものが予言の標的たり得なければ、後に実現して、すでに過去となったときでも、それを理解することはできないだろう。… 確かに見通すことができるのは、未来の一般的構造だけかもしれない。しかし実を言えば、一般的構造だけが、過去や未来について私たちが理解できる唯一のことではないか。だから、もしあなたが自分の時代をはっきり見ようと願うならば、遠くから見るべきなのだ。

p127 歴史全体を通して、これまで人間が、今まで述べてきたような条件が定める環境もしくは生の領域に少しでも似た状態に身を置いたことは一度もなかった。これは人間の運命に対して、十九世紀に導入された根本的な革新なのだ。人間存在のために、物理的また社会的な意味においても、新たな舞台が創設されたのだ。三つの原理がその新しい世界を可能にした。すなわち自由主義的デモクラシー、科学実験、産業主義である。これらの原理はどれも十九世紀に発明されたものではなく、十七、十八世紀に由来する。そののっぴきならぬ結果をしっかりと受け入れる必要がある。

[八]

p149 誰であれ思想を持とうと願う人は、真理を欲する姿勢、思想が課す競技の規則を受け入れることがまず必要である。思想や意見を調整する審判、すなわち議論を律する一連の基準が認められないような思想や意見は論外なのだ。・・・

討論の際に言及されるような、いくつかの喜遊曲的な知的立場に対する尊敬の念がないところには文化もない。

p150 文化の高低は、規範が正確に守られているかどうかの強弱によって計られる。

p152 一つの思想を持つとは、その思想にこめられた理性を所有していると信じることなのだ。つまり一つの理性、理解可能な真理でできた一つの世界が存在すると信じることである。思索する、意見を述べるということは、そうした要請

に訴えること、その要請に従うこと、その法規や裁定を受け
いれること、要するに私たちの考えの理由が議論されるとき
のその対話こそが着要請のための最良条件であることを信
じることなのである。文化の高低は、規範が正確に守られて
いるかどうかの強弱によって計られる。

[九]

p157 私は歴史の絶対的な決定論を信じない。むしろその反
対である。私はすべての生、つまり歴史的な生が純粋な瞬間か
ら構成されていると考えている。そして、それぞれの瞬間は
それに先立つ瞬間に関しては相対的に不確かなものであり、
そこでは現実が揺れ動いており、その場で足踏みし、いくつ
かある可能性のうちどれを選ぶべきかを決めかねている
と思っている。この形而上学的ためらいこそが、生的成るも
のすべての上に揺れと震えという間違えようのない性質を
与えている。

p158 退行や後戻りの怖れのないような、確実な進歩や進展
はどこにもないということだ。歴史においては、すべてが、
文字どおりすべてが可能である。… 個別的であれ集団的であ
れ、個人的であれ歴史的であれ、そのいずれでも、生は危
険を本質とする宇宙で唯一の実体だからである。それは、思
いもかけぬ出来事から構成されている。言葉の厳密な意味で
のドラマである。

p159 あらゆる古い文化はその内部に進行途上の老廃した

組織、角質化した物質の少なからずの堆積など、生命にとっての障害や有毒な廃棄物を引きずっていることは明らかなのだ。死んでしまった制度、かろうじて生き残ってはいるが、もはや内実のない価値や尊敬、必要以上に複雑化してしまつた解決策、無内容を露呈した規範などだ。

[十]

p170 文明は単にそこにあるものではないし、自立自存もあり得ないのだ。それは人工のものであり、芸術家あるいは職人を必要とする。もしあなたが文明の恩恵に浴したいと望みながら、文明の維持を心がけないなら、……、とんでもないことになる。

p173 文明は進めば進むほど、より複雑で難しいものになる。今日提起されている問題は、極めて込み入っている。これらの問題の高さに知性が到達し得る人の数は減り続けている。

p175 歴史的知識は、成熟した文明を維持し継続するための第一級の技術である。

p180 過去を真に超克する唯一の方法は、追い払わないことなのだ。過去を考慮に入れることである。

[十一]

p186 すべての生は闘いであり、自分自身になろうとする努力なのだ。

p192 理論的真実とは、議論の余地があるだけではなく、文

その意味や力すべてが議論の対象となることから来ている。議論から生まれ、議論されるからこそ生きている。ひとえに議論のために作られているのだ。しかし運命——生としてかくあるべき、またかくあるべからずなど——とは議論の対象ではなく、受け入れるか受け入れないかなのだ。もし受け入れるなら、私たちは本物である。もし受け入れないなら、私たちは私たち自身の否定であり偽造である。

p184 現在の状況を明らかにするには、たとえその容貌が特異に見えようとも、過去の別の時代と共通する部分を指摘することだ。

[十二] 「専門主義」の野蛮

p199 結論的に言えば、現代の科学者は大衆化した人間の典型である。… 文明の根源である科学自体が科学者を自動的に大衆に変えてしまうのだ。

p200 科学の仕事は、否応なく専門化せざるをえないものなのだ。

p201 専門家傾向が科学者一人ひとりの中で総合的な文化を遠くに追いやり始めた。… 分別ある人間になるためには知らなければならないことがいろいろあるが、彼はある特定の科学しか知らない。しかもその科学の中でも、彼はその熱心に研究している極小部分しか知らない人間なのだ。

p201 問題は、狭い視野の中に閉じ込められながら、実際には新事実を発見したり、彼自身はほとんど知らない科学を進

歩させたり、その学問と共に彼自身意識的にはっきりとは知らない思想のいわば百科事典を編み上げているということなのだ。専門家傾向が科学者一人ひとりの中で総合的な文化を遠くに追いやり始めた。… 分別ある人間になるためには知らなければならないことがいろいろあるが、彼はある特定

p203 これは全歴史を通じて他に類を見ない人間の形成だ

p204 これこそが専門家の態度である。政治、芸術、社会習慣、そして自分の専門以外の学問において、彼は原始人のような完全に無知な態度をとるだろう。

p205 現在は過去に例を見ないほど多数の「科学者たち」がいるのに、一七五〇年ごろよりも「教養人」の数が遥かに少ない。これこそが専門家の態度である。政治、芸術、社会習慣、そして自分の専門以外の学問において、彼は原始人のような完全に無知な態度をとるだろう。

[十四]

p229 これこれの時代にしかじかの人間、民族あるいは同質のグループが支配したと、と言うのと、これこれの日付にしかじかの意見、つまり思想、好み、熱望、目的などの体系が世界の中で優位を保っていたと言うのとは同じ意味なのだ。

p229 すべての権力の委譲、すべての統治者の交代は、同時に意見の変化となり、結果としてまさに歴史的院力の変化となるのだ。

p231 いま世界に起こっていることが何かを言い尽くそうとすることは、自らの思い上がりに自嘲していることだと心得るべきである。しかしまさに現実的なるものの全体像を直接に知ることは不可能だからこそ、私たちはある現実を意のままに構築したり、事物がある一定の様式に従って存在するのだと想定するよりほかに無い。かくして私たちは一つの様式を、つまり一つ概念あるいは概念の枠組みを手にする。私たちはこの枠組みを通して、ちょうど方眼紙の上に見るように、実際上の現実を見るのだが、そのときにのみ、現実に近いおおよその輪郭を知る。科学的方法はこれに立脚している。いやそれだけではなく、知性の使い方すべてがそれに基づいているのだ。

p232 厳密な意味で概念が考えるものは、口に出すこととは少しばかりずれがあり、そしてこの二重性の中にアイロニーがある。本当に考えているのはこうである。すなわち「厳密に言うなら、私はこれがAでもあのBでもないことを知っている。しかしそれがAでありBであると認めることで、あれこれの現実に対する自分の態度にわたし自身が納得して折り合いをつけるのだ。

理性についてのこうした認識論は、ギリシャ人の神経をいらだたせるものかもしれない。というのは、ギリシャ人は理性や概念の中に現実そのものを見出したと信じていたからである。ところが私たちは、理性や概念は人間が必要とするいわば使い慣れた道具のようなものであり、人間はそれを、

おのが生という無限の、そしてきわめて問題多き問題の真ただ中で、おのれ自身の状況を明らかにするために使うものだとしているのだ。生とは事物の間でおのれを支えるために、その事物と闘うことを言う。概念とはその攻撃に応じるために作り上げる戦略である。それゆえ、ある概念の内部をとことん調べてみるなら、それは事物そのものについては何も言っておらず、人間がその事物を使って成し得ること、あるいはそれからどのような被害を受けるかを要約していることが分かるのだ。

すべての概念の内容は常に生にかかわるものであり、人間のあり得る苦しみそのものだというこの限定的な意見は、わたしの知る限り今まで誰からも主張されてこなかった。しかし私の考えでは、それはカントに始まった哲学の道筋の当然の終着点だと思う。だからもし私たちがカントに至るまでの哲学の全過去をその光の下に検討してみるなら、すべての哲学者は根底において同じことを言ってきたように思えるであろう。ちなみに、すべての哲学的「発見」とはまさに「覆い」を「取る」ことであり、底にあったものを表面に引き上げてくることである。

p234 現代の歴史的現実を構成する数えきれないほどの事柄を、あまりに簡単な定式に纏めるのは、まちがいなくうまくいった場ですら一つの誇張に墮するだろう。だから私は、好むと好まざるとにかかわらず、思索するとは誇張することなのだというのを、ここで想起する必要があった。誇張を

望まない人は黙るしかない。いやそれどころか、おのれの知性を麻痺させ、おのれが愚かになる様子に直面せざるをえない。

p248 人間の生は、それ本来の性質からして、何ものに向けられていなければならない。・・・一方、生きるとは各自が自分で、自分のためにする何かである。他方、私にだけ重要な生であっても、何かに捧げていなければ緊張も「形」も持たずにばらばらになってしまう物でもある。

p249 エゴイズムは迷宮である。そんなことは分かりきったことだ。生きるとは、何かに向かって放たれることであり、目標に向かって歩むことである。その目標は、私の道りでもなければ私の生でもない。それは私が私の生を賭ける何ものかだ。したがって、それは私の生のはるか向こうにあるものなのだ。

p253 創造的な生は、高度な精神衛生の状態と大いなる品格、そして尊厳の意識を駆り立てる不断の刺激といったものを要求する。

p269 科学の明晰さは、それを実践する人の頭の中というよりも、彼らの語っている対象の中にある。本質的に混乱したもの、錯綜したものが、具体的な生の現実であり、それは常に唯一無二のものだ。しかし、そうした現実の中で正確に自己の位置を定めることのできる人、あらゆる生の状況が

示す混沌の下で、瞬間の秘密をかいま見ることのできる人がいる。つまりそうした生の中で道を失わない人こそが真の意味で頭脳明晰な人なのである。

p271 明晰な頭脳の持ち主とは、そうした幻想的な「思想」から解放されて生を正面から見据え、そしてそこで問題となるすべてを引き受け、しかも、結局は自らを迷える者だと感じている人のことなのだ。これこそが真実である。つまり、壱岐猫とは自らを迷える者だと感じることであり、その事実を受けいれる人は、すでに自己を見出し始めたのであり、自分の神聖な現実を発見し始めたのだ。なぜならその人は確固たる土台の上に乗っているからに他ならない。とかし費用流社と同じく彼は本能的にしがみつくものを探すだろう。そして悲劇的で緊急を要し、救済を求め続ける、完全に真剣なそのまなざしは、彼の生の混沌を秩序づけてくれるだろう。これこそ、すなわち漂流者の思想こそ本物の思想なのだ。・・・自分が本当に道に迷っているのだと感じない人間は、間違いなく自己を喪失する。つまり真の自己に出会うことも、自分の現実と出会うことも決してないのである。

以上のことはすべての領域において言える。すなわちそれ自体が生からの逃避である科学においてさえ真実なのだ（大多数の科学者は、自分の生と向き合うむことを恐れて科学に実を捧げている。彼らの頭は明晰ではない。あらゆる具体的状況に対する彼らの愚鈍さは周知の事実である）。私たちの科学的な考えは、ある問題を前にして今までどれだけ迷える

者であるか自覚したか、その問題性をどれほど良く見通したか、他人から受け入れた仮初の思想や対応策や兵庫や言葉自体にも頼ることはできないとどれほど理解したかに困っている。

p284 純然たる真実は、現代の国民とはあの可変的な原理、つまり終わりなき超克に運命づけられた原理の現時点における現われにすぎないということである。その原理とは現在ではもはや血でも言語でもない。なぜなら血縁的言語的起用動態は、フランスもしくはスペインでも、国家的統一かの原因ではなく結果だからだ。その原理は今では「自然の国境線」なのだ。

p285 人種あるいは言語の相対的同質性——それが一つの享受に値すると想定しての話だが——は、それに先立つ政治的統一の結果なのだ。つまり血も言語も国民国家を形成するものではなく、むしろ国民国家こそが初めから存在していた赤血球や有節音の相違を平等化するのだ。

p289 必要なのは、国民国家の秘密を、生物学的もしくは地理学的な性格を持つ外部的な原因に求めるのではなく、国家についてのそれは独自のインスピレーションやおのれの政治の中に求めようと決心することにある。

p290 国民とは、一世紀以上も前から西欧でこの言葉を発している意味においては、社会的権力とそれによって律せられている集団との「実体的結合」を意味している。

国民とは「日々の国民投票」・・・ルナン

p294 人間の生は未来の何かを絶えず気にかける。ただ今の瞬間から次に来る瞬間を気にかける。それゆえ、生きるとはいつも、本当にいつも、途切れなく休みなく何かを為すことなのだ。為すこと、すべての為すことは未来の実現を意味していることに、なぜ人は注目してこなかったのだろうか。

p296 国民は、共通の過去を所有する前に、この共同体をまず創造せねばならず、その創造の前にそれを夢見、欲し、計画しなければならない。

p303 歴史は第一に争いと一般的な意味での政治を際立たせる。統一という実りのためには、この政治の土壌作りがもっとも時間がかかる。しかし一つの場所で戦争が行なわれている間に、百もの土地では敵との交易が行なわれ、思想や芸術の形式や信条などが交換された。… その背後では敵対する諸国家が互いの生を織り合わせながら根気強く働いた。それぞれ新しい世代が生まれることに、魂の均質性が増大している。… 心理的には同一の構想、もしくは構造をほっておき、そして何よりも共通の内容を獲得しつつある。

p306 近き将来において人間にかかわる諸問題が、どういった重力の中心に向かって引きつけられるか誰も知らない。したがって世界の生は法外なほどの一時しのぎに身をまかせている。公的な場でまた私的な場で、また最も内面的なことに

おいても、行なわれるすべてが、文字どおりすべてが、いくつかの科学のいくつかの部門を除けば、一時しのぎなのだ。今日声高に語られ、誇示され、試みられ、称賛されるすべてのことを信用しない人こそが正鵠を射るだろう。

そのどれも値をもっていない。なぜならすべては言葉の悪い意味で純然たる作りごとであり、それがすべての生を気まぐれのようなものにしてしまっている。… 私たちがある人の行為をまぎれようもなく必要だと感じるときだけ、そこに真実がある。今日、自分の政治活動が不可避なものと感じている政治家など一人もいない。… 避けようもない場面から構成される生のほかに、おのれ自身に根をもった真正なる生はないのだ。

p309 誰もが、いま新しい生の原理を確立する切迫した必要性があることを認識している。

[イギリス人のためのエピローグ]

p323 「国民性」などというものは、人間らしさと言われるものすべてと同じく、生まれつきの恵みなどではなく、つくりあげられていくものなのだ。

国民性は歴史の中で作られ、壊され、また作り上げられる。

p324 イギリス人の…独自性は、人間の生の社会的側面あるいは集団的側面や、社会たり得るにはどうしたらいいかを捉えるその方法に根ざしている。

p325 人間と同じように、民族にも層々と積み上げられた徳

があるわけだが、それはある意味で欠点や限界の上に踏み固められている。

p329 ゲーテの言葉、「ただすべての人間によってのみ、人間たるものを生きることができる」

p334 間違いを犯したという実に否定的で敗北的な状況が、そのまちがいを認めたというだけで、その人にとっては魔法のように新たな勝利に変化するという不思議

p336 平和もまた人がやらなければならないもの、作り上げなければならない者、人間の全能力を総動員しなければならないものである

重要なもので人間に無償で与えられているものなど一つもない。むしろ人間が自分のために作らなければならぬもの、建設しなければならないものである。

p339 法の観念が「世論」という形に強化されたときのみ、法を有効な規範として語るができる

p340 ある願い事が、単にそう願っているからという理由だけで、魔法のように実現すると考えるのは不道德

その遂行の手段を早めに用意する、厳しい意志を伴った欲求のみが道徳的なのである。

p344 人間にかかわる事柄は「静止しているもの」ではない。まったく反対であり、歴史的な物、すなわち純粋な運動、たえざる変化だということだ。伝統的な法は、麻痺した現実のための規制にすぎない。

p345 歴史は何よりもまず地上における権力の分配の変動として現われる。しかし理論的ではあってもそうした権力の変動をぬかりなく率する正義の原則が存在しないかぎり、すべての平和主義は失恋の苦しみを味わう。なぜなら、歴史的現実がそのようなものであるなら、最大の不正は現状維持であるのは明らかであるからである。

人間はダイナミックな法を必要としている。つまり柔軟で動きのある法、変容の過程にある歴史に連れそうことのできる法を必要としている。

p349 平和主義とは、平和という人間的共存の別の様式を構築すること、… 一連の新しい技術全体の案出と行使を意味する。新しい技術の案出とは、地球上の権力の分配の変化に関する平等の原理を発見するところから始まる。

しかし新しい方の観念は、まだ法ではない。忘れてならないのは、法は一つの観念以上に多くの者から構成されている。

p350 一つの契約によって構成された社会とは、民法に対して持っている意味においての社会、すなわち結社にすぎない。しかし結社は、あらかじめある民放が現行の効力を持っている領域の上に登場するのでなければ、法的規範として存在することはできない。契約に基づく社会が登場するその領域とは、すでに存在する別の社会であり、それはいかなる契約によるものでもなく、昔からの共存の結果なのだ。この神聖な社会は結社などではなく、もう一つの社会と共存しているの

はただ名前だけである。

法は年長の兄弟とも言える慣習や習慣より活力はあるが、それらと同じくその基盤として、まとまりのある人間的共存を必要とする。

本物の社会が果たしてあるかどうかを知るための最も確実な兆候は、そこに法的事実があるかどうかを知ることである。… 国家という装置は社会の内部にあるのではなく、社会の進化がかなり進んだ段階で作られ出すということである。… 法は国家や制定法の活動がなくても存在する。

p353 優れて社会的な現象が自ずと生み出されないかぎり、持続的で安定した共存はあり得ない。ところで優れて社会的な現象とは、知的慣習としての「世論」、生の技術に関する慣習としての「習慣」、行為を導く慣習としての「道徳」、道徳を統治する慣習としての「法」のことである。慣習の一般的な性格は、当人が好むと好まざるとにかかわらず、故人に課せられる振る舞い、すなわち知的、感情的、物理的な規範のことである。

p353 要するに社会とは、互いにいくつかの有効性のある意見や価値評価に従うことを了解している個人の集まりである。こう考えると、紛争の際に依拠できる究極的な要請として機能する、たしかな有効性をもった共通の世界観なしには社会は存在しえないのである。

p355 歴史的現実、もっと普通の言葉で言うと、「人間世界

に起こること」は、ばらばらの事実の集積ではなく、厳密な骨格と明らかな構造を持っている。

もしかすると、この宇宙でみずから構造や組織を持っている唯一のものかもしれない。

2024年4月穀雨

海蝶 谷川修

